

令和4年度

一般入学試験B日程 学科試験問題

国語

1. 試験時間は、2科目合わせて120分間です。
2. 問題は、この冊子の1～19ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 保健医療学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

科学者たちはAジレンマに陥っていた。

それは、自分たちが研究しているのは果たして音楽なのかということだった。音楽が音符の動きであるのなら、なぜそれが人間にあらゆる「ア」をもたらすのか。音楽の最大の疑問は、あらゆる科学的アプローチの前にも厳然と立ちはだかつていた。科学者たちがふとため息を漏らすとき、その内面には常に、音楽とは、人間とは、そんなものではないはずだという葛藤があった。

私は、音楽家たちが一様にいう、「音楽は本当のところ、決まりなど何もないのです」という言葉には、まさに音楽の真実が込められていると感じていた。作曲のルールや禁則、つまり、やってはいけないという旋律進行の根拠も、気持ちよく聴こえるかどうか、不快でないかどうかといった非常に「B」なものである。協和音、不協和音といっても、その境界がいったいどこにあるかを規定することもできない。あえて禁則を犯すことで新たな展開が生まれ、いつしか時代に受け入れられる音となる場合もある。

これまで出会った科学者たちはいずれも、フルートやクラリネット、ピアノや三味線など、楽器の演奏を趣味とする人々である。オーケストラでコンサートマスターを務めた経験を持つ人もいた。好きが高じて遂に研究対象にしてしまったが、自分たちが研究しているのは本当に音楽なのだろうか。本来、根拠が曖昧な情動的な世界であることを自覚している彼らは、常にそのジレンマと向き合わなくてはならないのだった。

あれは、ギタリストの渡辺香津美に、アルバムのジャケットに使用された「耳」の写真について質問したときのことである。

「いや、たいした意味はありません。カメラマンの作品の中にお玉杓子の入れ墨をした耳の写真があったので、そのアイデアを使わせてもらっただけです。きっと彼は、音だから耳と近いものと思ったのでしようが、僕にとって、音はここなのです」

渡辺はそう言うと、右手を胸に当てたのだ。私はそのとき、ベートーベンの言葉（「心より出づ。願わくば再び心に至ら

んことを」を想起し、そこに至るまでの道のりの遠さに返す言葉を失った。

NTT基礎研究所の聴覚研究者・柏野^{かしの}牧夫はいった。

「いや、^cそれが本当のことなのかもしれません。僕たち科学者がおかしいのかもしれない。耳で聴いているといっても、結局は脳で感じてるわけですし、もしかしたら心臓に響くから感じるのかもしれない。リズムで体が動くことをみれば、脳さえ介在させてないのかもかもしれません。音楽家の方々のおっしゃることが、正しいのかもかもしれません。とにかく、今の科学はリアリティの感じられないことを研究することで満足しています。サイエンスはそんなものではないはずです」

リアリティとは何か——十代の頃からそんな疑問を抱えていた柏野に衝撃を与えたのは、ウイスコンシン大学教授のR・M・ワレンとの出会いだった。

一九六〇〜七〇年代、「サイエンス」や「ネイチャー」誌を中心に聴覚イリユージョンに関する研究を発表していたワレンは、聴覚研究の世界では知らぬ人はいない人物だった。NTTからの客員研究員としてワレンのもとを訪ねた当初、二十代の柏野は、当時隆盛だった知覚を計算でとらえようとするニューラルネットワークなどの計算理論の影響を強く受けていたために、新しい方法論を模索していたが打開策がなかなか見つからず、アメリカでもそれを継続研究するつもりでいた。しかし、いざ研究の段階になった^イ、当初は話を通じると思っていたワレンと考え方のギャップが際立ち^{きわ}、同じ言葉を使っても通じないことがたびたび起き始めた。

「結局、実際の研究よりも、今後何を研究していけばいいのかについて延々と話し合いました。あの一年間が私の研究の方向性に大きく影響したと思います。まるで禅問答でした。まず、人間が価値を感じるものに果たして根拠はあるのかということ。たとえば、ここに机がある、これがコップである、この紙切れは一万円だ、などといいますが、それはなぜそう信じるのでしょうか。その根拠、リアリティを問わなくてはいけない。そんなことをずっと考えて知覚の研究を始めた私に、ワレンは重要な示唆^{しき}を与えてくれたのです」

ここにあるのは絶対なのか。私たちの都合でリアルなだけであって、テーブルの上のコーヒークップも、身長百メートルの人にとってはまったくリアルではない。オウム真理教の信者たちが麻原彰晃^{あさはらしやうこう}を尊師とみなすことも、本来は相対的なことなのではないか。つまり、人はオウム真理教のケースを特殊な事件として見るが、人間誰しも本来は相対的なものを絶対化

して、それに気づかないことは往々にしてあるのではないか。では、それは何を根拠に絶対視できるのか。なぜ人は、それを疑いなく信じるのか。

リアリティを問うためには、知覚がそういう感覚をつくり出す根拠を知らなければわからないか。それを問うことが柏野の知覚研究の原点だった。

「何かに依拠して絶対化すると楽で足場はしつかりします。しかし、それは絶対化の罠にとらわれる危険性があるのです。絶対音感も、絶対音感が害なのではなく、絶対音感を信じることで、絶対化することのほうが害なのではないでしょうか。」

そもそも固定化した見方を壊すのがサイエンスですし、世の中はこう見えているからこうだというステレオタイプな考え方はやめようというのが芸術だと思います。絶対的な観念を壊して、一瞬でも自由になるものです。それなのに、ピアノでこう弾きなさいと押しつけるのは「ウ」とはいえないし、三代続けて同じ研究をやるのはサイエンスとはいえない。サイエンスとは、そもそも既成の価値観の破壊活動ではないかと思うのです」

科学者たちが音楽に取り組もうとする理由は、そこにあつた。耳だけでなく、脳だけでなく、心臓だけでなく、感覚器官すべてを連携させて感受する音楽とは、これまで方法論も考え方も互いに違う方向を向いていた学問分野の界面にあるのではないか。現在の唯脳論的傾向にある科学の考え方を突破する可能性を持つのが、音楽ではないか。だが、悲しいかな、それは科学では説明できないことの証明、人間の能力の壮大さを知ることの連続だった。

いろいろな音がある中で、なぜ人はドレミというカテゴリーをつくり、音楽を音楽として認識するのか。アナログな世界が知覚系を介することによって、なぜシンボリックなデジタル世界に変わり、それがメッセージを伝えたり、ある感覚を呼び起こすのか。リハビリやメデイテーションに効果があるとされるのも、音楽の何かが確実に体に働きかけていることの証拠ではないか。

「音楽は、言葉のように明瞭なシンボル性はありません。乳幼児のコミュニケーションを見ると、言葉も本来は情動的なものをもっとメインだとわかります。ただ、言葉はシンボリックなもの、つまり文法構造や意味、内容が非常に具体的すぎ、あまりにも発達しているため、情動的な側面は二の次でも研究は充分できます。でも、音楽は情動的側面がメインですね。体に訴えかけるものだけを求めて音楽を聴く人も、世の中にたくさんいると思います。」

たとえば、ダンスミュージックは、頭で聴くというよりも身体的なものです。単調なリズムの繰り返しや大音響でハイになったり、お経を延々唱えることで宗教的な瞑想体験めいそうをすることがあります。そうした側面のあるものが、まさに音楽だと思ふのです。しかし、なぜそうなるのか……。[エ]はまだまだ研究していないことばかりです。私は聴覚の研究をしているのであって、音楽を研究しているとは、まだ、とてもいえないのです」

私は、この取材中、ある言葉に突き動かされるように音楽家や科学者たちと話し合ってきた。文化人類学者クロード・レヴィ・ストロースが、その著書『神話論』において記した「音楽は人類究極の謎なぞであり、音楽の謎が解き明かされれば人類進化の謎の多くも解かれる」という言葉である。それは結局私にとって、素晴らしい音楽がなぜ人を感動させるのかという問いだったのではないかと今になってようやく気づいた。そして、その一つの手がかりとして絶対音感や音楽の科学的側面にその回答を求めていたのではないかと。だが、取材に歩けば歩くほど絶望的な気分になってきた。その謎が解かれるのは二十一世紀どころか天文学的未来に近いかもしれないか。WHYの行き着く先に、BECAUSEはあるのだろうか。

どこかに、E わかりたくないという本音もあるのは事実だ。だからこそ、ドレミという音の周波数だけを扱って音楽をわかったと明言するのではなく、音楽はわからない、人間の能力は深遠であると[オ]気味に語る科学者たちの振る舞いが好もしく感じられるのだ。もちろん彼らがあきらめないことはわかっている。脳を切り刻む。現象を観察する。心を語る。人間に知への欲求がある限り、それは繰り返し返される。自分を知るために、そして、百年、二百年後の子孫のために、今を積み重ねるのである。

(最相葉月『絶対音感』より)

*出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

問1 空欄ア～オにはいる熟語として最も適するものを、それぞれ1～4から一つ選びなさい。

	ア						
	1	希望		イ	1	途端	
	2	経験		2	途中		
	3	知性		3	間際		
	4	感情		4	先端		
							ウ
				4	芸術		1
				3	強制		考慮
				2	破壊		エ
							1
				4	情動		科学
				3	宗教		オ
				2			
				1			反省
				4	落胆		
				3	訓示		
				2	自省		

問2 傍線部A「ジレンマ」とは何か、文中の語句を使って三十字以内で記述しなさい。

問3 空欄Bにはいる語句として最も適するものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

- | | |
|---|-----|
| 1 | 享樂的 |
| 2 | 主觀的 |
| 3 | 感覺的 |
| 4 | 犯罪的 |

問 4 傍線部 C 「それ」とは何か最も適するものを、次の 1 ～ 4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 脳で音楽を感じることに
- 2 音楽が心に働きかけることに
- 3 リズムで体が動くことに
- 4 耳から音楽を聴くことに

問 5 傍線部 D 「絶対化の罣^{わな}」として最も適するものを、次の 1 ～ 4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 明確な根拠なしに信じることに
- 2 楽をして足場をしっかりとさせることに
- 3 ステレオタイプな考え方を止めることに
- 4 既成の価値観を破壊することに

問 6 傍線部 E 「わかりたくないという本音」として最も適するものを、次の 1 ～ 4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 音楽は科学的側面だけで説明することができうる。
- 2 絶対音感という日本の音楽教育の秘密を守りたい。
- 3 人間の能力を簡単に解き明かされると興ざめする。
- 4 音楽と科学の間には超えてはいけない一線がある。

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

私は、短篇小説を書くとき一尾の鮎あゆを念頭に置いている。できれば鮎のような姿の作品が書きたい。無駄な装飾のない、簡素で、すっきりとした作品。小粒でも早瀬に押し流されない力を秘めている作品。素朴ながら時折ひらと身を躍らせて見る人の目に銀鱗の残像を留めるような作品——けれども、これは飽くまでも一つの願望で、そんな鮎のような作品が書けたと思ったことは残念ながらまだ一度もない。

座右に、表紙の黄ばんだ一冊の古ノートがあつて、それにモーツアルトの言葉が書き留めてある。アンリ・ゲオンという人の著書からの抜き書きで、モーツアルトが少年時代にヨハン・シヨーベルトのソナタを聴きながら学び取ったという教訓だが、私はそれを短篇小説を書くときの自戒にしている。

こんな言葉だ。

A

座右のノートといったが、別段それに短篇小説を書くための心得や腹案や段取りのたぐいがこまごまと書き込んであるわけではない。書きはじめる前にくわしくノートをとる人もいるが、私は、よほど長いものや何百年も昔の話を書くときを除いてノートはとらない主義である。

ノートをとって、それに縛られるのが厭だ。きちんと設計図を引いてしまうと、肝腎の書くという作業がただの味気ない労働になってしまうのもおもしろくない。これを、こう書いて、こんなふうな作品に、という程度の見当だけはつけておいて、あとは自分という書き手に賭けたいと思う。最初の一行が次の一行を産み、その一行がまた次の一行を産む、という具合にじりじりと書き進めているうちに、書き出す前には思いもしなかった収穫に恵まれないとも限らない。

だから、その無野の分厚い座右のノートも、いわば余白だらけの落書帳のようなもので、その余白のところどころに、いずれは書こうと思っっている作品の題名もしくは中身のヒントだけが、ぽつりぽつりと書き留めてあるにすぎない。一ページに一つずつ、白い紙面の右肩のところ、たとえば「ののしり」、「とんかつ」、「いっそ相撲取りになろうと郷里を出奔した

弱年の父」というふう^アに。

私は時々、そんな言葉のきれはしがぼつんと書いてあるだけのページをひらいて、長いこと見詰める。誰が見ても言葉のきれはしのほかほかだけの白い紙面だが、私にだけは、そこをすっかり汚しているおびただしい数の字句や想念が見える。私はそれらを掻き回し、目ぼしいものを点検し、やがて絶望してノートを閉じるが、そんなことを何度も繰り返しているうちに、底の方から影法師のように形をなして立ち上ってくるものがある。やがて糸口にふさわしい文句も浮かんでくる。

短篇小説は書き出しの一行が見つかればしめたもので、私は帯を締め直し、初めて小説を書こうとする人のようにいそいそと万年筆のペン先を洗う。

なぜ短篇小説をせっせと書くのかと訊かれれば、結局は好きだからだと答えるほかはない。学生のころから短い文章が好きであった。短篇に優れた作家たちを敬愛した。外国の作家でも、ルナール、モーパッサン、フィリップ、それにチェホンテ時代からのチェホフを繰り返し読んだ。自分で習作をするようになって、未完の短文(まだ纏め方がわからなかったのだ)をたくさん書いた。そのころから三十枚のいいものを書くのが念願だったが、それはいまも変わらない。

新しい短篇小説を歩きはじめるときの、あの背筋がうそ寒くなる緊張感がいい。それから、射程距離を測りながら注意深く歩いている間の充足感。思い通りに歩き終えたあとの阿片の放心。

唐突だが、好きといえば将棋も私は好きである。以前はよく先輩作家を訪ねて立てつづけに何番も指したものだが、近頃はもっぱら棋書が相手の一人将棋で、新聞の棋譜も毎日読むし、眠る前には将棋雑誌の付録の〈次の一手〉というのを一問ずつ解く。碁は、やらない。一度習いかけたが、どうにも馴染めなくて、やめてしまった。

碁と将棋を小説にたとえれば、碁は長篇小説で、将棋は短篇小説だろう。碁は、長篇小説のように、広い戦場のあちらこちらにしかるべき布石をしておいて最後に綱を引き絞るが、将棋の方は、一手々々が勝負で油断も隙もならないところが、短篇小説に似ている。

私は、先輩と対局中しばしば長考に陥って、よく、^ア下手の考え休むに似たりと笑われたものだが、小説の方も同様で、

ついつい締め切りに遅れてしまう。けれども、Cでは考えに考えた揚句、最も悪い手を指してしまうことがあるように、小説も時間をたっぷりかけたからといって必ずしもいいものが出るとは限らない。それでも、惨敗すればもう一番といきり立ち、書き損じれば今度こそはとまたぞろ次の書き出して、懲りることがない。

結局、どちらも性に合っているということだろうか。

そうはいつても、私はなにも自分の性に合っている短篇だけが小説だと思っっているわけではない。好きなものだけを書いて生涯を終えられたら、それは至福というものだが、なかなかイそうは問屋が卸してくれない。人によっては、自分のなかに、短篇ではとても汲み切れない深い井戸を抱えている者がいる。そういう厄介な井戸は、結果はともかく、やはり長篇や中篇の力を借りてじっくり探りを入れてみるほかはないのである。

私自身も、これまでに何度か長篇を試みたが、結果はいずれも芳しくなかった。原因はわかっている。長篇の構想というものが全く不得手な上に、ひたすら短篇の筆法で押し通そうとしたからである。

全体をいくつかの章に分け、章をさらに短くいくつかに分けると、自分にはちょうど手頃な枚数になるから、それを一つずつ月刊雑誌に連載する。すると、私は毎月の分を、まるで短篇小説を書くようにいちいち書き出しと結びを考え、例の手々が勝負で油断も隙もならない将棋の流儀でやってしまう。これでは書く方も辛いが、読む方もさぞくたびれるだろう。それはわかっているのだが、自分でもどうにもならない。

長篇小説は、ところどころにわざと粗くて退屈な部分を挟むのがこつだと思ってくれた人がいる。つまり、あそびで、それが読者の息抜きになり、作品の風通しをよくする窓にもなるのだという。なるほどと思うが、私にはやはりあそびが書けない。短篇小説にあそびなどないからである。だから、私の連載物を本にすれば、同じ密度のページが延々とつづいて読者に息苦しい思いをさせることになる。

私の書いた長いものうちで、長篇小説と呼んでいいものがあるとしても、せいぜい一つか二つだろう。あとは、短篇仕立ての章をいくつも繋いだ鈍行列車のようなものだと思っっている。

私は、長篇をしくじるたびに、出稼ぎの農夫が都会から郷里へ逃げ帰るようにして短篇小説へ舞い戻った。

いつの日か、情けない思いをさせられたときなどに、「D 短篇で来い。」といえるようなものを、一つだけ書きたい。(二つで死ぬるか?) 三つ書きたい。いや、七つ。いや……。願わくば、書くものすべてが E 生きのいい鮎 のようであれ。

(三浦哲郎『盆土産と十七の短篇』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～ウの本文における意味として最も適するものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア 下手の考え休むに似たり

- 1 よい考えが浮かばないときは長く考えるより休む方がよい。
- 2 だめな考えを休ませることはいつそう答を出せなくさせる。
- 3 よい考えも浮かばないのに長く考えこむのは時間の無駄だ。
- 4 だめな考えを一生懸命続けることは休むよりはよいことだ。

イ そうは問屋が卸してくれない

- 1 物事はそんなに具合よく運ぶものではない。
- 2 そうやすやす出来るなら誰も苦労はしない。
- 3 物事はきちんと筋を通さなければ不可能だ。
- 4 そう簡単に許可してもらえないものではない。

ウ 舞い戻った

- 1 ふらふら引き返した。
- 2 調子に乗って戻った。
- 3 気分よく引き返した。
- 4 元のところへ戻った。

問2 空欄Aに入れるのに最も適切な言葉を、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 十分に表現するためには、けっして表現しすぎないこと。しかもそれでいて完全な表現にすること。ただし、ごくわずかの言葉で表現すること。
- 2 十分に表現するためには、けっして言葉不足にしないこと。しかもそれでいて簡単な表現にすること。だが、おびただし内容表現すること。
- 3 十分に表現するためには、けっして喩えを忘れないこと。しかもそれでいて優雅な表現にすること。ただし、はっきりした言葉で表現すること。
- 4 十分に表現するためには、けっして練った言葉を選ばないこと。しかしながら複雑な表現にすること。だが、わかりやすい言葉で表現すること。

問3 傍線部B「影法師のように形をなして立ち上ってくるもの」とありますが、それはどんなものと考えられますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 言葉のきれはしや余白にかくされているおおくの言葉や表現。
- 2 言葉のきれはしや余白に埋もれているぼんやりした小説の姿。
- 3 言葉のきれはしや余白に示されているとくに主張したい思想。
- 4 言葉のきれはしや余白に見つけられる懐かしい思い出の数々。

問4 空欄Cに適する一語を、本文中から抜き出しなさい。

問5 傍線部D「短篇で来い。」とは、言い換えるところのようなものと考えられますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 短篇を持ってこい。
- 2 短篇が最も上等だ。
- 3 短篇で勝負しよう。
- 4 短篇こそが小説だ。

問6 傍線部E「生きのいい鮎」とありますが、その比喻する内容を三十字前後で説明しなさい。

第三問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えなさい。

著作物使用許諾申請中につき掲載ができません。許可され次第、「第三問」を公開します。